



創立1880年

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

Tel 03-6302-1960

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

発行所 公益財団法人 東京YMCA

発行人 菅谷 淳

東京YMCA

10

2021年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

バングラデシュとミャンマーYMCAの支援へ コロナ禍の国際協力



ネビドーYMCAクリニック



「AMBULANCE (救急車)」と書かれたYMCAの車



食料品やマスクを届けるYMCAボランティアたち

ミャンマーの首都ネビドーYMCAは、保育園など教育プログラムのほか、病院のない農村の診療所を運営してきたYMCAですが、昨年以降、教育プログラムは休止

診療所のみ活動しています。ミャンマーは国民の半数以上が農村で暮らしているにもかかわらず、病院は都会にしかありません。ネビドーYMCAは、誰もが医療を受けら

れるようにと、病院のない地区2カ所で診療所を運営してきました。医療費が払えない人も多いため、基本的に診療費や薬代は無料とし、払える人

には募金してもらうという寄付による診療所です。そんな農村をコロナが襲っています。ミャンマーでのワクチン接種は、9月17日時点で55歳以上しか行き渡

っておらず、YMCAの診療所はコロナ対応に追われています。医師1人、看護師2人という体制の中、YMCAの車は

救急車に、時には霊柩車となって住民を搬送しています。ボランティアスタッフがマスクや救済物資を届けたりと奮闘しています。ネビドーYMCAのジャクソン総主事は日本へ

が現地を訪れた際には、ご家族で歓待してくれたのですが、今年8月にはご両親が相次いで感染して亡くなりました。地域でも多数の方が亡くなっており、「筆舌に尽くしがたい悲しみ」とのメッセージが寄せられています。

ネビドーYMCAの詳細はこちら



ミャンマー首都ネビドーYMCA 病院のない農村で 患者を搬送

東京YMCAと交流のあるバングラデシュとミャンマーYMCAより、近況が届きました。もともと貧困地域での教育や保健事業を行ってきた両YMCAは、コロナによる影響も深刻で、本格的な救援が必要な事態に直面しています。



昨年7月、国土の3分の1が浸水する大洪水が発生した際の食糧支援の様子。バングラデシュは地理的に洪水がたえず、東京YMCAは2008年までに8基のシェルターを建設した。

9月にオンラインで行なった東京YMCAの国際担当スタッフ会で、近況を語るバングラデシュYMCA同盟ニブン・サングマ総主事



「働く子どもたちの学校 (N F P E)」の様子。2019年度撮影。家事育児などが忙しく、義務教育が受けられない子どもたちが通う。現在は約230人が在籍。バングラデシュの支援詳細はこちら⇒



バングラデシュYMCA 休校1年半 食事もままならず

バングラデシュではコロナのため、ほぼすべての学校で一年半以上の休校が続いています。東京

YMCAが長く支援を続けている「N F P E (働く子どもたちの学校)」も休校を余儀なくされて

いますが、電子機器のない家庭が多く、児童たちはまったく教育の機会を奪われたままとなってい

ます。以前から識字率の低さが課題となっていたこともあり、教師たちは子どもの将来を心配し、自主的に家庭訪問を開

始。教材を届けるなどして子どもたちを励ましていますが、保護者も職を失い、食事もできない家

庭も多いとのこと。子どもたちの精神状態も優れず、もつと定期的な訪問と食糧などの配布が必要だと、東京YMCAに支援要請がありました。

◆募金のお願い◆

【振込先】 三菱UFJ銀行 神田支店 (普) 1185213
公益財団法人東京YMCA
【WEB募金】 クレジットカード払いはこちら⇒
【お問合せ】 東京YMCA国際部 tel. 03-6302-1960
E-mail: kokusai@tokyoymca.org



【YMCAの国際協力】

YMCAは、世界各地のYMCAが行なう活動をサポートし合うことによって国際協力活動を行なっています。地元のニーズをよく把握し、地域に根差した活動をしている現地YMCAをサポートすることで、より適切な支援を届けるためです。ご支援ご協力をお願いします。詳細はこちら⇒ <http://tokyo.ymca.or.jp/kokusai/>

赤△三角

初めて東京YMCAを訪れてから今年で30年になる。その2年ほど前に大学のサークル「学生YMCA」に入った。大学の顧問の先生は、小学生の時に神田のブルに通ったのがYMCAとの出会いだったという▼YMCAは本当に出会いの場だと思ふ。その出会いから、自分で気が付かなかった次のステージがわかってくる。私は学生YMCAでインドに行ったことからアジアと出会い、アジア各地のYMCAとのつながりの中で支えられ、生かされて、香港に住む今もつながっている▼若い時は、その出会いが人生の時間の中でどれほどの重みをもってくるのか実感できなかったが、出合いを通してつながり、あらゆる垣根を越えていった。いつかは直面する困難をも乗り越えていけると願っている▼若い世代を支える歳になり、大学で教えるながら、日本から来た留学生に出会いの場をと、いろいろアレンジを試みている。年齢50を過ぎてもやっていることは30年前と変わらないのかもしれない▼遠く香港にいながら、東京YMCAの会員であり続けるのは、私の「ホームYMCA」だという思いからだ。いつでもまた帰っていきける場、それもまたYMCAだと思ふ。(会員 小出雅生)

東京YMCA社会体育・保育専門学校生70人 パラリンピックでボランティア



開催か否か。最後まで議論がたえなかった「東京2020オリンピック・パラリンピック」。感染の不安をぬぐえない状況ではありましたが、東京YMCA社会体育・保育専門学校の学生70人が、パラリンピックのボランティアとして参加しました。参加した学生・教員と、YMCAと関係の深い知的障害者水泳連盟の新井静さんにお話を伺いました。
(広報室)

感動と感謝

東京YMCA社会体育・保育専門学校 教員
中島きよさん

今回のパラリンピックボランティアには、日ごろスポーツインストラクターやトレーナーを目指して勉強している社会体育課程の2年生約70人が有志で参加しました。新型コロナウイルスの感染が広がる中、途中で参加を断念した学生もあり、学校としても少なからぬ不安と葛藤をかかえた大会でしたが、結果としては感染者を出さず、無事に終了することができ安堵しています。

当校の学生たちが担当したのは、水泳会場で選手たちの荷物を預かる「カゴ隊」と呼ばれる役割でした。選手に着替えを預かり、ゴール後に手渡す仕事です。予選から決勝まで一日に数十のレースが行なわれる中、正確かつ迅速に運ばないといけないにも影響するため「大会運営の鍵」とも言われる仕事です。

特にパラリンピックでは、重度の肢体障がいのある選手がいますので、荷物の渡し方も一様ではありません。介助者のいない選手にはマスクの着脱や着替えを手伝うこともありますし、今回は消毒作業もありました。学生たちはこれまでも他の大会運営をサポートした経験がありましたが、世界最高峰の大会でもあり、かなり緊張しながらの任務だったと思います。感染対策のため選手たちとの交流は制限されましたが、障がいを超えて競技に挑む選手に接し、パラリンピックという大舞台に立てた経験は、将来、スポーツの指導者として役立ってくれると信じています。このような機会を与えてくれた方々と学校に感謝するばかりです。

障がい者水泳の普及めざして

日本知的障害者水泳連盟 運営委員長
新井 静さん

私はYMCAで約25年間、水泳などスポーツの指導に携わり、今年から主に「一般社団法人日本知的障害者水泳連盟」で活動しています。この連盟は知的障害者水泳の普及・振興のために1999年、東京YMCAの講師だった及川栄子氏ほか関係者の尽力で作られた団体で、現在は各種大会の運営や選手派遣などを行っています。パラリンピックでは競泳選手のコーチとして、合宿中の指導や体調管理、メンタルサポートを担いました。

今回、コロナ対策には本心に気を使いました。体調面もさることながら、家族の応援なども限られる中、選手たちが精神的にもつらくならないよう配慮が必要でした。緊張で食べられなくなる選手や、逆に食べ過ぎる選手もありました。日々体重管理をし、自信をつける練習メニューや言葉かけなど工夫しながら大会にのぞみました。

大会が無事終了したことで、金メダルも獲得できたこと、そして大会後に競泳への関心が高まったことは嬉しいことです。障がいのある人たちが通える水泳教室はまだ少ないのが現状です。YMCAは選手の養成機関ではありませんが、私を含めYMCAで育てられた人は多くいます。障がいの有無によらず、また選手を目指す人だけでなく誰もが生涯スポーツとして水泳を楽しめる。YMCAのような環境がこれからも必要だと思います。

◆ YMCAと健康教育の歴史 ◆

1932年、YMCAで練習するロス五輪選手たち



YMCAは「青少年の健全な育成」「健康な生活」のためにスポーツを推進してきた団体です。バスケットボール・バレーボールを発案するなど、スポーツの普及・発展に深く関わってきたため、オリンピックとも少なからぬ関係があります。1912年に日本が初めて出場したストックホルム・オリンピックでは、東京YMCAの主事だった大森兵蔵が監督を務めました。1917年には日本初の室内プール付総合体育館を作り、近代スポーツを日本に普及。1932年のロサンゼルス・オリンピックではYMCAで合宿した競泳選手たちが5つの金メダルを獲得しました(=写真)。1964年の東京オリンピックでは、国際オリンピック委員会会長のブランデー氏が東京YMCAでスピーチをするなど、数々のエピソードがあります。

「YMCA健康教育の歴史」はこちら
<http://tokyo.ymca.or.jp/wellness/history.html>



ボランティアをした学生たちの感想文 ー抜粋ー

高橋みありさん

レース後に消毒に行くと、選手たちはみんな笑顔で声をかけてくれました。とても心が暖かくなって感動しました。今回の大会で“障がいのある人”の概念が私の中で大きく変わりました。最初は同情する気持ちがありましたが、全然違いました。頑張る選手たちはカッコよかったです。そんな選手を少しでも支えられたこと、大記録の瞬間に居られたこと、すべてが貴重な経験でした。

小川 晃司さん

新型コロナの感染が拡大していく中、選手も関係者もさまざまな気持ちを抱いていたと思います。でも、選手たちのこれまでの努力が無駄にならないように、私は全力でサポートしました。目標に向かって覚悟を決めてのぞむ選手たちの目は輝いていました。競技を目の前で見た時は鳥肌がたちました。パラならでの工夫や、仕事の姿勢など、多くを学ぶことができました。

関 柚乃さん

選手たちの力強い泳ぎを間近で見て、たくさんの感動と勇気をもらいました。競泳は他のパラスポーツと異なり、障がいの違いに合わせてルールが細かく分かれています。そのルールの一つ一つに選手への配慮や意味があること、そういう配慮やサポートがあれば、どんな障がいがあっても泳げること。全力で泳ぐ選手たちにたくさん学ばせてもらいました。

齋藤 虹輝さん

今回のパラリンピックで、私は障がいについて深く考えることができました。私は将来テニススクールを作りたいと思っているのですが、障がいのある方々も楽しくテニスができるようにするにはどうしたらいいか。バリアフリーについて、またその方々への接し方や手助けの仕方など。今回の経験を活かし、さらに経験を積みながら、実行していきたいと思いました。

山本 祐斗さん

私は副キャプテンとして、学生ボランティアのシフトを組んだり、指示出しをする係を担当しました。簡単な仕事のように見えたのですが、70人でも足りないくらいに大変でした。でもたくさんの選手たちに関われたこと、外国の選手たちも片言の日本語で「ありがとう」と言ってくれたことなど、一生心に残る体験ができました。

鈴木 梨乃さん

選手たちの泳ぐ姿は本当にすばらしかったです。私は実習で子どもの水泳指導をしています。教える自分自身が先にあきらめるようなことは絶対にしてはいけなと、改めて思いました。誰でも可能性は無限にある。その可能性を最大限に信じて子どもたちに接していきたいです。そして私自身も限界まで頑張って、後悔のない人生を送りたいと強く感じました。



総主事カフェによる。

米国大リーグで過去の記録を次々と塗り替えた大谷翔平選手。暗いニュースが多かった中で彼の活躍は私たちに希望を与えてくれました。彼が人気なのは「投げる」「打つ」「走る」に秀でているのに加えて、「礼儀正しい」からと言われています。球場にゴミが落ちているとそっと拾ってポケットに入れる、相手チームのバットが落ちていると拾って届ける、ホームラン王を競っている時に敬遠されても笑顔で手を振るなど、子どもの頃から野球を愛し、敬意を払ってプレーしてきた基本姿勢が、国を越えてもぶれることなく継承されているのかなと思います。

さて世界的ヒーローになった大谷選手ですが、彼が高校生の時に作成した「目標達成シート」をご存知でしょうか。ニュースやネットでも紹介されていますが、花巻東高校の佐々木洋監督の教えによって作った、通称「マンダラチャート」と言われるものです。まず3×3の9マスを用意し、その中央に目標や夢、成し遂げたいことを一つだけ書き込みます。続いて周囲の8マスにその目標や夢を達成するために必要な要素を記入します。さらにこの8つの要素を獲得するために必要な行動目標をそれぞれ8つずつ記入すれば完成となります。細分化され具体的にになった80の目標をクリアしていけば、最終的に一番真ん中にある最後の目標または夢が達成されるというものです。

大谷選手は目標達成シートの真ん中に「8球団からのドラフト1位指名」を入れました。そのために必要な8つの要素は「体づくり」「メンタル」「コントロール」「キレ」「スピード160キロ」「変化球」「運」「人間性」としました。通常ドラフトで1位指名を獲得するためには、ほとんどの選手は野球技術と能力の向上についてのみ書くと思いますが、大谷選手は「人間性」も重要であると考えました。そしてこの「人間性」を囲む8つの要素の中に「礼儀」があります。他に「感性」「計画性」「思いやり」「感謝」「継続力」「信頼される人間」「愛される人間」があります。

私はこれを見て、YMCAの全人的成長の理念を思い浮かべました。通常プロスポーツマンになるには身体的能力の強化と、関連する知性の向上が最優先で求められます。しかし一見あまり関係のないように見える精神的な健全さ、大谷選手の言う「人間性」も実は大変重要な要素です。「身体」「知性」に加えて「精神」の三角形がバランスよく整った時に、大谷選手のように人々を魅了する人間が育つのかなと思います。他にも「思いやり」「感謝」「信頼」「愛」という言葉が人間性の柱に並んでいます。まさにYMCAがプログラムを通じて子どもたちに伝えてきた大切な価値と一緒にです。神様から与えられたたった一つの命、その命を豊かに育むために、YMCAは今まで同様、全人的成長を目指し、大切な価値を伝えるプログラムを展開していきたいと思います。

東京ーNY フロストバレー便り

*ニューヨーク近郊の日系人を対象にキャンプ等を行なっている「東京-フロストバレーYMCAパートナーシップ」。現地向けのスタッフの紹介をします。

ニューヨークでは、変異株による新たな感染やワクチン反対派による抗議デモなど課題はあるものの、ブロードウェイやスポーツ観戦も再開され、活気が戻りつつあります。

フロストバレーYMCAは、今年2年ぶりにサマーキャンプを実施しました。感染対策のため定員を抑えての開催でしたが、例年の60%ほどが参加。NY州による感染対策ガイドラインが二転三転し、キャンプの安全指針もたびたび修正を余儀なくされましたが、無事にキャンプを行なえたことを嬉しく思います。保護者からは、この状況下でキャンプが開催されたことに感謝の言葉を多数いただきました。大自然の中で思う存分体を動かし、仲間と再会し、また新しい仲間を作る。参加者のそんな楽しそうな笑い声や歌声に、私たちスタッフも励まされた夏でした。

運営にあたり37人の青年がスタッフとして関わってくれました。キャンプが中止されていた2年間、今後の見通しも危ぶまれ続けた中でも待ち続け、新たな感染対策ルールを守りながら参加者をサポートしてくれた彼らに心から感謝しています。そんな彼らの姿を見て、参加者も大きな成長を遂げてくれたと思います。

今年のキャンプでは、ちょっとした誤解からトラブルに発展したり、他者との距離感を上手に測れず衝突が生まれたり、コミュニケーションが上手に取れないといった事例が多くありました。コロナ禍で他者との交流が制限された影響ではないかと私は感じています。煩わしい人間関係を避けることも可能だった生活と違い、キャンプでは他者と協力し支え合い、尊重し合う必要があります。この環境の変化に適応することが困難だった参加者が多かったように思います。

逆の見方をすれば、こういった他者との深い交流ができる環境の重要性を再確認した機会でもありました。コロナ禍での生活は異常であり、私たち一人ひとりに大きな影響を及ぼしました。今夏のキャンプで子どもたちは、人間関係の難しさを感じるとともに他者と一緒に過ごすことの嬉しさ、楽しさ、喜びを体験してくれたのではと思います。

コロナウイルスが今後の生活にどのような影響を及ぼすかは未だ不明瞭ですが、子どもたちには豊かな人間関係を育んでほしいと願っています。

(東京-フロストバレーYMCA
パートナーシップ 嶋山 徹郎)



まずは展示パネルで学んだ後、自分たちでできるアクションプランを考えて投稿しました。

国連による「持続可能な開発目標「SDGs」(エスディージーズ)」に掲げられた17の目標を

子どもたちもプラン考えて

エスディージーズSDGsってなあに？

つたほか、子どもたち自身にアクションプランを考えてもらいました。参加した子どもたちは150人。それぞれ一生懸命にアクションプランを考えてくれました。例えば「すべての人に健康と福祉」の項目には「まずしい国の人をたすける」「0円で病院にいける券をつくる」「日本やいろいろな国がワクチンをあげる」「健康だから元気に大人になるまで生きられる」「一人一人のことを考えて行動し、貧しい人たちにはその分やさしくするなど、たくさんのプラン

が並びました。また会場ではSDGsを行動にうつすためのビンゴカードを配布。その後4週間かけて「食べ残しをしなかった」「ゴミ拾いをした」など、カードに書かれた行動を続けてビンゴを完成させました。自分で考えた行動をするマスもあり、「SDGsを友だちに教えた」「紙の無駄遣いをしな

「YMCAの活動をSDGsの視点から考える」をテーマに9月17日、日本YMCA同盟によるオンライン研修が行なわれました。講師は「認定NPO法人 開発教育協会(DEAR)」事務局の中村絵乃氏。全国のスタッフ約30人が受講し、持続可能な社会のために何をすべきか、理解を深めました。

<研修報告>

YMCAの活動をSDGsの視点から考える

東陽町コミュニティセンター 木村 卓司

した。話し合う内に、特にSDGsと意識しなくても、持続可能な社会につながっている事例もあることに気づきました。そもそもSDGsは環境問題だけでなく、貧困や教育、保健、福祉など17の目標からなり、日常の暮らし全般に関わるものです。そのため日ごろから地域社会の身近な問題にみんなで取り組んでいくことが、持続可能な社会につながるかと学びました。

印象に残ったのは、2つのキーワード「誰一人取り残さないこと」と「変革」です。私たちは持続可能な社会で育ってきたのであり、普通に生活したり前と想っている生活こそが持続不可能な世界を作っているということ。世界中の誰もが取り残されず、未来のためには、私たちは変わらなければなりません。

中村さんは「持続可能な開発は、将来の世代のニーズを損なうことなく、現代の世代のニーズを満たすこと」とし、2030年の目標年度で終わりのではなく「持続可能なことは何かを考える。SDGsの考え方を理解することが大切」と言います。

関東大震災98年 在日本韓国MCAと追悼礼拝～過ちが繰り返されぬよう～

東京YMCAは毎年9月1日早朝に、在日本韓国YMCA(千代田区)と合同で「関東大震災追悼合同早天祈祷会」を行なっています。震災後98年となった今年は、コロナ禍のためオンラインでの参加者もありましたが、両YMCA合わせて約50人が集いました。明治学院大学の徐正敏(ソ・ジョン・ミン)教授からメッセージをいただき、関東大震災後のデマによって多くの朝鮮人が殺戮されたことについて改めて考え、無念の死への追悼の時をもつと共に、二度と悲劇が繰り返されないよう心を合わせて祈りました。(広報室)